

伊勢物語古本系統に関する研究序説

——武者小路本の本文を中心として——

田 口 守

序 論

故池田亀鑑博士の立てられた伊勢物語の古本系統に対して、山田清市氏が「伊勢物語古本は定家本か」と主張されたのは、われわれの記憶に新しい。氏のお説に従えば、従来古本とされてきた古写本群は、定家本の一種に過ぎなかったということになる。これに対して片桐洋一氏は、池田氏説に立つて古本という一系統の存続を主張され、両説はここに鋭く対立した形になっている。本稿では武者小路本の本文の性格を分析しながら、この古本の問題をもあわせて考えることにした。

さて、武者小路本伊勢物語は鎌倉中期は下るまいとされる古写本であるが、本文は第六十段までしか伝わらず、伊勢物語の上冊を書写したものと考えられている。これまでの研究に触れながらこの本の問題点を明らかにしてゆくと、まずこの古写本は、むしろこうじみの氏によってはじめて世に紹介されている。氏は「新資料古鈔伊勢物語の一本について」（「解釈と鑑賞」昭和31年11月号）と題する論文でこの本の書誌学的解説を行う一方、その漢字混りの特異な表記法にも注目して和漢混淆文の一資料ともなることを指摘された。次いで『伊勢物語に就きての研究（補遺篇）』（昭和36年12月刊）にその全文が翻刻され、又これに加えられた大津有一博士の周到な解説によって、われわれはその全貌を正確に知ることが出来るようになった。そして、最近上梓された福井貞助氏著『伊勢物語生成論』（昭和40年4月刊）でも論じられ、特にここには、先の用字法の問題を扱って真名本伊勢物語の成立に及ぶ注目すべき御論が展開されている。

以上がこの本についてのこれまでの主な研究であるが、これによってもわかるように、武者小路本は他の諸本に比して、特に注目され論じられて来たという種類のものではない。それに又、従来の研究によって、この本の包蔵する問題点の全てが

明らかに成り、極め尽くされたかという決してそうではないのである。例えば、これから論じようとする本文一つを取り出してみても、六十段までの零本という障害のためか、武者小路本は依然「別本」として系統不明のままに残されているし、真名本との関係にしても、もつと突っ込んで論じなければならぬ問題を残しているように思われる。更に私見によれば、既に散佚してしまった非初冠本との関係さえもここに指摘することが出来るのであって、武者小路本の資料的価値は極めて大きいと考えられて来るのである（これと真名本・非初冠本との関係については続稿を用意している）。

さて武者小路本の本文について、勢語伝本研究の権威大津博士は、先の『補遺篇』で、「各段の排列や字句は比較的定家本に近いが、塗籠本、時頼本など共通するもの、この本独自の異文もある」から「やはり別本とすべきであろう」と言われ、岩波文庫本『伊勢物語』（昭和39年12月刊）の解説でも「系統不明の諸本の項にこの本を入れ、「六十段までしかないため、果してどの系統に入れてよいかわからない」と述べておられる。ここに言う「別本」とは、池田亀鑑博士がかつて伝藤原藤房筆本伊勢物語を紹介した際に、塗籠本や定家本や古本や真名本などではない、系統不明の本を「別本」とされたのに倣った命名である。福井氏も武者小路本を別本とされる点変わらない。

確かに現状ではこれを別本として扱うのもやむを得ないかも知れない。しかしながら、六十段までという限界内でこの本の系統を明らかにしたらどうなるか。私の見方に立てば、武者小路本は別本として孤立的に扱うよりも、古本系の一本と考えるのが妥当であり、又これを古本系に加えることによって、古本自体の抱えている問題にも、強い照明を当てることが可能になってくるのである。

いま、六十段までについて種々の角度から検討してみると、武者小路本は古本的特色を充分に備えており、特にその本文は古本系統の中でも最福寺本に最も近く、時頼本、伝肖柏筆本に近似し、又近年新たに発見された伝兼好筆本に対しても、強い親近性を有するものであることがわかるのである。以下、こうした角度から武者小路本の本文について私見を述べることにする。

武者小路本の本文の系統を探る前提として、はじめに伊勢物語現存諸本の分類基準を明らかにしておきたい。勢語伝本の分類は新資料の発見に伴いながら年々精密化しているが、いま現存本について便宜上次のように考えることにする。

定家本
……百二十五段本

古本
……非百二十五段本(広略本)

塗籠本

真名本

このうち最後の真名本は、定家本や古本と同じく百二十五段を数えるが、章段とその順序に二の差異が認められるし、真名という表記上の特色も考慮して、百二十五段本に統括して扱うことをしなかった。また『参考伊勢物語』所引為家本は、現存本に準じてここに掲げることと可能であるが、これは狩使本と初冠本の混合本である上に、その母胎となった初冠本が如何なる種類のものであるか明らかでないので除外した。

ところで、一二の例外を除けば、現存の主要伝本は悉く右分類に収めることが出来ることに注目すべきであろう。現在系統不明とされている武者小路本・伝藤原房筆本の二本も、共に物語の後半を欠く零本である故に、即ち本文の性格よりも主に物理的、外的事情によってその系統を明らかにすることが出来ないものであるから、もし将来その後半に相当する部分が発見され、またその周辺の伝本に対する考察が深められるとすれば、必ずこれら二本の帰属も明らかになり、恐らく右分類のいづれかに属せしめることが可能となるのであろう。——以下の論は、こうした前提に立つての推論であることを、はじめに断っておきたい。

さて、右のように分類した場合の各系統の特色を、武者小路本との比較が可能な60段までについて見ると、まず章段とその配列順序は左のようになる。

左表によると、定家本、古本、広本間には60段までに關する限り同様の段序を見出すが、塗籠本はこれらといたく異なり、真名本も29段と30段の間に定家本に無い³Bという章段を保有している点に、やはり差異を認めることが出来る。そこで、こうした各系統の段序と武者小路本のそれとを比較してみると、武者小路本は、定家

本、古本、広本の三系統と全く同様の段序を持ち、塗籠本、真名本とは異なる結果を見る故に、これは定家本か古本か広本かの上冊を書写したものと一応推測でき、少なくとも、差異の甚だしい現塗籠本の上册であったとは到底考えられないし、同様の理由から真名本の前半であったと見ることも困難になってくる。

武者小路本と同段序の右三系統について、武者小路本には無い61段以降の段序を見ると、定家本と古本とは最終尾の125段に至るまで同じ配列を保っているが、広本は後半これら二系統と大きく異なってきたり、一体武者小路本が定家本や古本などの百二十五段本と同じ段序を持つていたか、広本流の配列を61段以降に展開していかは興味ある問題となってくる。ただ広本の段序は本によって異なるけれども、それらの間に広本的特徴というものを見出すことは、それほど困難でないで、次に一応大島本によって、61段以降の広本の段序を示してみた。

大島本(広本) 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 A 82 83 84
85 86 87 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 106 107 108 102 103 104 105 109 110 111 112 113 118 119 88 120 121 122 123 124 114
125 117: 115: B C 114 D E F 37 G 30 74 H 111 115 95 117 116 G I J B K 36 L M N 71 O P Q F C 109, 73
116: 116: B C 114 D E F 37 G 30 74 H 111 115 95 117 116 G I J B K 36 L M N 71 O P Q F C 109, 73

注、点線部は皇太后宮越後本、傍線部は小式部内侍本で、共に大島本の注記による。

次に、60段までの所収和歌について考えてみると、広本系諸本は定家本や古本より二首多く歌を含有していることに気付く。左に掲げた36段の(a)、40段の(b)がそれで、その点線部を定家本や古本は欠く。

(36段) ——省略——

たにせはみゝねまてはへるたまかつらたえんとひとわかおもはなくに
女がへし

(a) いつはりとおもふものからいまさらにかまことをかわれたのまん
(40段) ——省略——

定家本	古本	広本	塗籠本	真名本
1	1	1	1	1
2	2	2	2	2
3	3	3	3	3
4	4	4	4	4
5	5	5	5	5
6	6	6	6	6
7	7	7	7	7
8	8	8	8	8
9	9	9	9	9
10	10	10	10	10
11	11	11	11	11
12	12	12	12	12
13	13	13	13	13
14	14	14	14	14
15	15	15	15	15
16	16	16	16	16
17	17	17	17	17
18	18	18	18	18
19	19	19	19	19
20	20	20	20	20
21	21	21	21	21
22	22	22	22	22
23	23	23	23	23
24	24	24	24	24
25	25	25	25	25
26	26	26	26	26
27	27	27	27	27
28	28	28	28	28
29	29	29	29	29
30	30	30	30	30
31	31	31	31	31
32	32	32	32	32
33	33	33	33	33
34	34	34	34	34
35	35	35	35	35
36	36	36	36	36
37	37	37	37	37
38	38	38	38	38
39	39	39	39	39
40	40	40	40	40
41	41	41	41	41
42	42	42	42	42
43	43	43	43	43
44	44	44	44	44
45	45	45	45	45
46	46	46	46	46
47	47	47	47	47
48	48	48	48	48
49	49	49	49	49
50	50	50	50	50
51	51	51	51	51
52	52	52	52	52
53	53	53	53	53
54	54	54	54	54
55	55	55	55	55
56	56	56	56	56
57	57	57	57	57
58	58	58	58	58
59	59	59	59	59
60	60	60	60	60

またのひのいぬのときはかりになんからうしていきいたりけるをんなかへる
ひとにつけて

(b) いつこまでをくりはしつと人とはあかぬわかれのなみたかはまて
とありけるをそぎきておとこはたえいりける……(引用は阿波国文庫旧蔵本)。

さてこの二箇所を武者小路本で見ると、36段には広本と同じく(a)の歌を含むが、40段では(b)の歌を欠き、内容も定家本や古本と変わるところがない。結局36段では広本に近く、40段では定家本や古本に近いといった状態で、これら二首の和歌の有無も武者小路本の後半部の形態を推測する決め手とはならなかったのである。

しかしながらここで、広本系諸本が例外なく、(a)、(b)の二首を有しているのに対して、百二十五段本がこれを含まないといつても、全く例外が存しない訳ではないから、もし武者小路本の場合もそうした例外の一つと考えることが出来るならば、やや百二十五段本に傾くと言ふことが出来るかも知れない。百二十五段本の例外としては、(a)を有し(b)を欠くもの(この点では武者小路本と同じ)に武田本系(定家本)の高野本があり、また(a)を欠き(b)を有するものには、古本系の伝肖柏筆本がある。しかし、武田本系高野本の場合は、歴大な数にのぼる定家本が全てこれらの歌を含まないことから考えと、あまり過大に評価することは危険である。

一方古本は、かつて池田龜鑑博士が「和歌の数に於ては、一二の例外、即ち傳慈鎮筆本の二百八首、傳肖柏筆本の二百十首を除いては、何れも二百九首を算し、その順序も亦定家本同様である」と述べられたように、原則として和歌の数も定家本に等しいが、又例外も存したのである。更にここで、片桐氏が紹介された次の注釈書を想起することも意義深いであろう。

片桐氏紹介の守山八幡宮秘蔵の勢語注釈書は、物語の全文を引用しているので勢語の一伝本として扱ふことも可能である。氏の調査によると、この注釈書には四箇所二十丁ほどの脱落が認められるけれども、「同筆にて、一段より一二五段まで番号が付されていることなどから見て、定家本系統と同じ段数、同じ段序を持つ、いわゆる百二十五段本の一つであることは誤りない事実である」とされ、これを古本と認定された。ところがこの本も、歌数において定家本より一首多いという顕著な特徴を持っていたのである。その一首とは、武者小路本と同じく36段の(a)の歌であった。

以上のことから直に、武者小路本を百二十五段本、或いは古本と断定するのは早計であるとしても、少なくとも36段に(a)の歌を有することが、百二十五段本という想定を妨げるものでないということだけは言えるであろう。

二

武者小路本は果して百二十五段本であったか広本であったか。この問題を本文の比較からもう少し詳しく検討してみたい。そのための方法としてまず次のような操作をする。

百二十五段本、広本から代表としてそれぞれ一本を選ぶ。次にこれら二本を比較して本文上差異のある箇所を取り出す。ここでは、百二十五段本からは天福本系定家本の三条西家旧蔵本、広本側からは阿波国文庫旧蔵本をそれぞれ選んだ。

右抽出箇所について百二十五段本、広本系諸本の異同を明らかにし、それらを百二十五段本の本文、広本の本文、これら二系統に跨る本文に分けて整理する。この際広本側には本文上密接な関係を有する塗籠本(伝民部卿局筆本)を加えてみた。だから、実際には百二十五段本対非百二十五段本ということになるが、非百二十五段本の中核はあくまで広本であることに変わりない。

さて、右のような操作によって作成された異同本文群を参考にして、武者小路本の本文の系統を考えると、左のような結果になる。

左のデーターの説明 ○印は百二十五段本の本文。 ×印は非百二十五段本の本文。 □印は百二十五段本、非百二十五段本の両系統に跨る本文。その上に付した「武」印の記号は、その本文が武者小路本と一致することを示す。ただ武者小路本が□印の本文に一致する時は、百二十五段本、非百二十五段本の判定が不可能であるから、先の三条西家・阿波国文庫両本の対立箇所であっても、左のデーターからは除外した。また、「武」印が○印の上にある時はその項を(+)とし、×印上に来た時は(-)の判定を与えた。

◇武者小路本は百二十五段本か、非百二十五段本か◇
武○花さかりに……………(定家・古本系諸本)

No. 1 (4段+)
×はなさかりなるに……………(大・誠・泉・塗)
×はなさかりなるを……………(神・阿)

○たちて、いてみ・れと……………(古・最)
○たちてみみ・みれと……………(古・慈)

No. 2 (4段+)
武○立てみあてみ・れと……………(定・千・七・文、古一時)
○たちてみあてみ・れと……………(定家・古本系諸本)

×・・みとれ……………(阿・大・神・塗)
×たちてみれと……………(泉)

○しげくもあらねとも……………(古|最)
○しげくもあらねと……………(古|肖)
□しげくもあらねと……………(定家・古本系諸本)↑↓(泉)

×さかし・からねと……………(誠)
武×たかし・からねと……………(大)
×たかしくもあらねと……………(阿・神・塗)

武○おとこ……………(定家・古本系諸本)
×おとこは……………(誠・阿・泉・大・神・塗)

○神なり……………(定|東)
武○神なる……………(定家・古本系諸本)

□かみのなる……………(誠・阿・泉・大・神・塗)↑↓(古|為・承)
□つかまつる……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉)

×つか・まつりひとの……………(阿)
武×つかうまつりひとの……………(大・神・塗)
武○ほりかはのおと……………(定家・古本系諸本)

×ほりかはの大將……………(誠・阿・泉・大・神・塗)
○なく人……………(定家・古本系諸本)

武×なく人の……………(誠・阿・泉・大・神・塗)
武○あつまに……………(定家・古本系諸本)

□あつまへ……………(誠・阿・泉・大・神・塗)↑↓(古|肖)
武○なりは……………(定家・古本系諸本)

×なを(り)は……………(塗)
×なをは……………(大)
×なをは……………(誠・阿・泉・神)

○さつおりしも……………(定|氏)
武○さるおりしも……………(定家・古本系諸本)

×さるおりにしも……………(誠)
×さるをりに……………(泉)
×さるをりに……………(阿・大・神・塗)↑↓(古|肖・最)

武○あむなり……………(定|理、古|為)
□あ・なり……………(定家・古本系諸本)↑↓(大・泉)
□あるなり……………(古|慈)↑↓(誠)

□あり……………(阿・神・塗)↑↓(古|最)
○女ニ・モ……………(古|時)
武○女にても……………(古|肖)

○女とも……………(定家・古本系諸本)
×をんな……………(神)

×をんなには……………(誠・阿・泉・大・塗)
武○ころをみては……………(定家・古本系諸本)

×所にて……………(塗)
×こころみて……………(誠)
×こころもちては……………(阿・大・神)

×こころもちては……………(泉)
武○人からは……………(定家・古本系諸本)

×人から……………(誠・阿・泉・大・神・塗)
○まつしう・ても……………(定|高)

○まつしくしても……………(定|重)
武○まつしく・ても……………(古|肖・最)
○まつしくへても……………(古|為)

○まつしくへても……………(定家・古本系諸本)
×まつしくへて……………(誠)

×まつしくて……………(阿・泉・大・神・塗)
○あひみし事を……………(定家・古本系諸本)
□あひみしとしを……………(古|最)↑↓(泉)

武×へにけるとしを……………(誠・阿・大・神・塗)
□きえずはありとも……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉)
×きゑ・はありと……………(阿)

No. 19 (18段) (+)
武○しらぎくは……………(定家・古本系諸本)
—
×しらゆき(きく)は……………(大)
×しらゆきは……………(誠・阿・泉・神・塗)
武○ともみゆ……………(定家・古本系諸本)

No. 20 (18段) (+)
—
×ともみよ……………(泉)
×とそみる……………(誠・阿・大・神・塗)

No. 21 (19段) (+)
○あひしり・ける……………(古承)
武○あひしりたりける……………(定家・古本系諸本)
—
×あひしりたりけり……………(塗)
□あひしれりけり……………(誠・阿・泉・大・神)↑↓(定氏、古相)

No. 22 (19段) (+)
武○いひける……………(定家・古本系諸本)
—
×ありける……………(誠・阿・泉・大・神・塗)
武○きてみれば……………(定家・古本系諸本)

No. 23 (23段) (+)
—
×ゆきてみれば……………(誠)
□いきてみれば……………(阿・泉・大・神・塗)↑↓(定州、古相)

No. 24 (24段) (+)
武○まちわひて……………(古慈)
○まちわひたり……………(定隆)
○まちわひたりけるにやありけん……………(古肖)
—
□まちわひたりけるに……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉・大・塗)

No. 25 (26段) (-)
×まちわひたるに……………(阿・神)
—
□わひたりける……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉・大)

No. 26 (26段) (+)
武×わらひける……………(阿・神)
—
○みなとのさはくかな(らし)……………(定氏・理・桃)
○涙(涙)のさはくかな……………(古最)
○ナミタノサハクカナ……………(古時)
武○みなとのさはく哉……………(定家・古本系諸本)
—
×みなとそさはくらし……………(阿・泉・神)
×なみたそさはくらし……………(誠・大)

No. 27 (29段) (+)
武○はなの賀……………(定家・古本系諸本)
—
×はなのえん……………(誠・阿・泉・大・神・塗)

No. 28 (29段) (+)
武○にる時はなし……………(定家・古本系諸本)
○にる時そなき……………(古栄)
○にるものそときはなし……………(定氏)

No. 29 (31段) (-)
×にるをり(とき)はなし……………(大)
□にるおりはなし……………(阿・神)↑↓(古相・最)
×しくものはなき……………(泉)
×しくものはなき……………(塗)
×にるものはなし……………(誠)

No. 30 (32段) (+)
□なにの……………(定家・古本系諸本)↑↓(泉)
—
×なに……………(大)
武×なにを……………(誠・阿・神・塗)

No. 31 (33段) (-)
武○といへりければ……………(定雅・理、古承)
武○といへりけれとも……………(古最)
□といへりけれと……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉・大)
×・(ナシ)……………(阿・神)

No. 32 (34段) (-)
○このたひいきてまたは……………(定理)
□このたひいきては……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉)
武×このたひいきて……………(阿・大・神)
×このたひかゝりなは……………(塗)

No. 33 (39段) (-)
○おもなく……………(定玄、古最)
○おもなくて……………(定冷)
□おもなくて……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠)

No. 34 (39段) (-)
武×おもひく……………(阿・泉・大・神・塗)
—
○ともちけちきゆるものとも……………(古最)
○ともしける(ち)きゆるものとも……………(古為)
□ともしけちきゆるものとも……………(定家・古本系諸本)↑↓(泉)
—
×・(ナシ)……………(阿・神)
武×ともしひのきゆらんことも……………(誠・大)

No. 34 (39段) (-)
 ○われはしらねにすな……………(定一氏)
 ○ワレハシラスヤ……………(古一時)
 □われはしらすな……………(定家・古本系諸本)↑↓(泉)
 ×……………(阿・神)
 武×われはえしらす……………(阿・大)
 □うへのきぬ……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠 泉・塗)

No. 35 (41段) (-)
 武×きぬ……………(阿・大・神)
 □あまと……………(定家・古本系諸本)↑↓(泉)

No. 36 (43段) (-)
 武×あまたに……………(阿・誠・神・塗)
 □あまと……………(定家・古本系諸本)↑↓(泉)

No. 37 (44段) (+)
 ○いゑとうしに……………(定一桃)
 武○家とうしに……………(定一七・明・一奈・雅・文・州・古一肖・時)
 □いゑとうし……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠)
 □いへとうしして……………(阿・泉・神・塗)↑↓(定一氏・理、古一相為米)
 ×いゑとうしに……………(大)

No. 38 (46段) (+)
 ○あさましよう(へ)えたいめむせて……………(定一理)
 武○あさましくえたいめむせて……………(定家系武田本・流布本、古本)
 □あさましくたいめんせて……………(定家系天福本他)↑↓(誠・大)
 ×あさましようたいめ・せて……………(阿・神)
 ×あさましようたいめむせて……………(泉)

武○月日のへにける……………(定家・古本系諸本)

No. 39 (46段) (+)
 ×月・へにける……………(阿・神)
 □月日へにける……………(誠・泉、大)↑↓(定一高、古一為)

No. 40 (47段) (-)
 ×ま・りて……………(神)
 武×まさりて……………(誠・阿・泉・大・塗)
 ○まさりつム……………(定家・古本系諸本)

No. 41 (49段) (+)
 ○ヲカシケナルキムヲシラフトテ……………(古一最)
 ○をかしきぎんをしらへけるを……………(古一最)
 武○おかしけなりけるを……………(定家・古本系諸本)
 □をかしけなるを……………(誠・阿・泉・大神・塗)↑↓(定一雅・文、古一肖)

No. 42 (50段) (-)
 □八のこゝろは……………(定家・古本系諸本)↑↓(誠・泉)
 ×人のこゝろよ……………(阿・神)
 ×人のこゝろや(は)……………(大)
 武×人のこゝろや……………(塗)
 武○かるそわひしき……………(定家・古本系諸本)

No. 43 (52段) (+)
 ×かるそかなしき……………(泉)
 ×かるそをかしき……………(誠)
 ×かくそをよしき……………(阿・大・神・塗)
 ○いそかはしく……………(定一奈)
 ○いそかしく……………(定家・古本系諸本)

No. 44 (60段) (-)
 武×いそかしようて……………(阿・大・神)
 ×……………(泉)
 ×いそかしく……………(誠・塗)

注 1 塗籠本は欠段のためNo. 25・26・30・33・34・38・39を欠く。

2 ゴシック体は非百二十五段本の略字。

さて、(+)の項は武者小路本が百二十五段本に一致し、(-)の項は非百二十五段本に一致するものであるから、右データの(+)、(-)を集計して武者小路本の本文の傾向を判定すると、

百二十五段本と一致するもの……………28例
 非百二十五段本と一致するもの……………16例

となつて、武者小路本は百二十五段本に断然傾くことを知る。

しかしながら、先のような操作によって設定された右四十四項の○印、×印の本文が、果して百二十五段本なり非百二十五段本なりの本文の特徴を充分に示すものであるか。——こうした疑問に答えるために、はじめの数例を順次見てゆくと、まずNo. 1は「なる」(断定の助動詞「なり」の連体形)の有無によって両系統は明確に区別でき、No. 2も「見雑然」として「あ(い)」「居る」の連用形)の有無によって区別可能となる。No. 3から「しけく」と「たかし(さかし)」の対立を読みとることは、さして困難でない。No. 4は両者の区別明瞭。No. 5の「神なり」「神なる」という「の」(助詞)を欠く用例は百二十五段本の本文であるから、古本二例の例外が存しても、これと一致する武者小路本の本文を、百二十五段本側に属するとして異論はないであろう。No. 6もまた同様である。……その

他 No. 13. No. 16 のように対立点を見出し難いような例でも、共に助詞「も」の有無という点に着目すれば、両系統の差異ははっきり認識できる。

以上のように、多くの場合に何らかの形で両系統の差異を見出すのであるが、例えば No. 12. No. 24. No. 30. No. 32 の場合のように、「武」とした本文が、百二十五段本なり非百二十五段本なりの本文の特徴を十分に備えていると言いつれな例も、また存することは否定できない。しかし、いまこの四項を除いて計算しても、

(+)……………25例
(-)……………15例

となつて、武者小路本が百二十五段本に一致する例は、やはり圧倒的に多い。

このように、武者小路本はその本文を通して見ても百二十五段本へ強く傾き、もしここで完本を想定するとすれば、やはり百二十五段本と考えてほとんど誤りないであろう。

三

それでは武者小路本は、現存の百二十五段本の中の何れに最も近似するか。武者小路本は百二十五段本と考えられるが、先のデータが示すように、非百二十五段本と共通する本文を多量に含んでいる事実も、又見逃してはなるまい。何故ならば、定家本、特に定家自筆本への還元も可能だとされる天福本や武田本では、そうしたことは頭底考えられないし、問題の多い流布本系の一を想像してみても、やはり無理と考えられるからである。

さて武者小路本が、従来の定家本の概念から外れたものであるとすると、百二十五段本の中では当然古本との関係が重視されてこよう。しかもここには、「古本は家本か」という問題も横たわっているので、古本と密接な関係を有するとされる所謂根源本第二系統（定家本）をも射程距離に置いて、武者小路本と古本の比較を試みてみることにする。

その前に、古本とは一体いかなる性格の本であるか見ておきたい。古く古本という名で呼ばれていたものは真名本であった。例えば荷田春満の『伊勢物語童子問』には次のようにある。

「中古已来の歌学者流のめてはやす本は、大概定家卿の書きおかれたる伊勢物語を正本と心得て、異本の正しきあれども、それを目にもかけず、しひて定家卿の本を正本と心得たる故に、古本をも皆反古の様思ひなして、今世に絶行く

如くになれると見えたり。今の世に異本とて持伝へたる伊勢物語みえず。幸に六条宮の撰み給へる真名伊勢物語世に持伝れども、真名にて書たる本なれば……。」

これによつて春満が、定家本より古い成立の本を古本と言つていたこと、又それが定家本尊重のあまり世に用いられなくなつて、現存しているのは真名本だけだと考へていたことがわかる。又、賀茂真淵の『伊勢物語古意』にも、「是に古本有て、真字にて書たり」と有り、更に、

「さて、今ある五百年こなたの本に対へ見るに、今の本はいと字のみだれたるを、よくも他を見くらべずして書伝へてや有けん、ことわりなき所多し。故にあづま麻呂の大人も古本を用ゐられたり。」

と記されていて、春満の今本（定家本）対古本（真名本）の関係が、ここにもそのまま受け継がれていることを知る。

池田龜鑑博士は、この「古本」なる名称をそのまま踏襲しながらも、真名本との関係を解消して、新たに伝為相筆本（略号・相）、伝慈鎮為家兩筆本（為）、伝良経筆本（良）、承久本（承）、伝飛鳥井榮雅書入本（榮）、最福寺本（最）、伝慈鎮筆本（慈）、伝肖柏筆本（肖）、時頼本（時）の計九本をこれに充てられた。博士はまた古本概念を

「定家本に先行する本と系統を同じくする本、及びこれと密接な関係に置かれてゐる諸本を包含する一群の写本。」

と規定し、具体的な伝本の形態を、

「定家本と同じく百二十五段より成り、章段の配列もこれと何等相違する所がない。和歌の数に於ては、一二の例外、即ち伝慈鎮筆本の二百八首、伝肖柏筆本の二百十首を除いては、何れも二百九首を算し、その順序も亦定家本同様である。」

と説明された。結局古本は、百二十五段本から定家本を引いた残りのものと解されるから、その性格は定家本との差異、離反度によつて把えていくのが、方法的に妥当な態度とすべきであろう。

ところが藤原定家という人物は、生涯に少なくとも数回伊勢物語を書写していると言われているから、未だ定家本と確認されていない定家本が、古本の中に紛れ込んでいる可能性も充分であろう。そこに古本研究の問題点がある。

山田清市氏は、宮本氏蔵伝為氏筆本（氏）、天理図書館蔵伝為家筆本（理）の二本を、定家本の系列に新たに加えて根源本第二系統とされたが、これと古本を比較

検討された結果、古本をも同系統と見て定家本とされた。

他方片桐洋一氏は、伝兼好筆本伊勢物語や二、三の勢語注釈書の紹介を通して、古本系統に関する注目すべき研究を発表しておられる。それによると、古本は定家本と同段数同段序の百二十五段本であるが、本文は「ある時は定家本系に近く、ある時は大島本系に近く、ある時は塗籠本系に近く、またある時は全く独自な本文を持つている……」と言われ、しかも、この「定家本系と同段数同段序」ということで辛うじてくくれる本」即ち古本系統が、鎌倉時代の流布本であったとされた。そして更に、定家の時代もこれに近い状態であって、定家はその中の幾つかを次々に書き写していった、とするのが氏の御見解である。いずれにしても古本の研究では、定家の手を経ない百二十五段本の性格を明らかにすること、古本の中に含まれている未確認の定家を除去するという作業を、同時に進めてゆかなければならない。

それでは次に、武者小路本の本文と古本のそれを比較して、両者の関係を調べることにしよう。次表に掲げた通し番号にして五十五例の武者小路本の本文は、天福本や武田本系の主要伝本と比較して差異の認められた本文で、しかも古本と根源本第二系統の計十一本のいずれかに一致するものである。但し伝長経筆本は物語の前半を欠き、武者小路本と比較することが出来ないから、除外した。

○印は、上欄の武者小路本に一致することを表す。また、武者小路本の本文の特徴を示すために、参考として天福本の本文も掲げておいた。

通番号	武者小路本	定家本(天福本)	古本	根源本第二系統
(一)	1むかし人は	むかし人は	○	○
(二)	1面白事とや	おもしろきこととや	○	○
(三)	2いまたさたまさけける	またさたまさけける	○	○
(四)	2あめそはふるに	あめそはふるに	○	○
(五)	3おほきさといふもの	おほきさといふもの	○	○
(六)	4おほきさいの宮の	おほきさいの宮の	○	○
(七)	4たちてみめてみれと	たちてみめてみれと	○	○
(八)	5ついでちの	ついでちの	○	○
(九)	6なにそと	なにそと	○	○
(一〇)	6けなましものを	きえなましものを	○	○
(一一)	6おにとはいふなり	おにとはいふなり	○	○
(一二)	7すきにし方の	すきゆくかたの	○	○
(一三)	8いきけり	ゆきけり	○	○
(一四)	9いきけり	ゆきけり	○	○
(一五)	9もとにとて	御もとにとて	○	○
(一六)	9あかきか	あかき	○	○

(一七)	9うをくふ	いをくふ	○	○
(一八)	9とよみければ	とよめりければ	○	○
(一九)	10人の国までも	人のくにても	○	○
(二〇)	10思には	たのむには	○	○
(二一)	14ゆきたりけり	ゆきいたりけり	○	○
(二二)	14夜ろこひて	よろこほひて	○	○
(二三)	15おもへとも	おもへとも	○	○
(二四)	15いかみせん	いかみはせん	○	○
(二五)	16まつしくても	まつしくへても	○	○
(二六)	20はるなかるへし	春なかるらく	○	○
(二七)	21かしこく	いとかしこく	○	○
(二八)	21心かろし	心かるし	○	○
(二九)	22といひけれと	とはいひけれと	○	○
(三〇)	23よくけさうして	ようけさうして	○	○
(三一)	23ゆくらん	こゆるん	○	○
(三二)	24別をくしみて	わかれおしみて	○	○
(三三)	24まちわひて	まちわひたりけるに	○	○
(三四)	24哥をよみて	うたをなんよみて	○	○
(三五)	26もろこしふねも	もろこし舟の	○	○
(三六)	27一夜ゆきて	ひと夜いきて	○	○
(三七)	28ちきりしものを	むすひしものを	○	○
(三八)	29めしあつめられたり	むしあつめられたり	○	○
(三九)	32昔男	むかし	○	○
(四〇)	32といへりけれとも	といへりけれと	○	○
(四一)	37うしろめたなくや	うしろめたなくや	○	○
(四二)	39女車	女のくるま	○	○
(四三)	40はかりに	はかりになん	○	○
(四四)	41いたしけれとも	いたしけれと	○	○
(四五)	41きよらかなる	きよらかなる	○	○
(四六)	42いくは	にくくは	○	○
(四七)	43いとなまめきて	いなまめきて	○	○
(四八)	44家童子に	いなとうし	○	○
(四九)	46し給けん	し給にけん	○	○
(五〇)	50すくる月日	すくるよはひ	○	○
(五一)	51菊植けるをみて	きくうへけるに	○	○
(五二)	51うつし植は	うへしうへは	○	○
(五三)	56思あまりて	思ひ思ひあまりて	○	○
(五四)	59今はかきりの	今はかきりと	○	○
(五五)	60ほとに	ほとの	○	○

集計

3
8
9
28
3
18
24
5
6

武者小路本と、古本系諸本、根源本第二系統の二本との親疎関係を数量的に確かめようとしたのが、右表最後の集計である。この結果から、武者小路本との一致

数は、古本系諸本に平均して現われたのでなく、最福寺本に最も多く、次いで時頼本、伝肖柏筆本の順になっていることを知る。同一条件で作業を進めながら、これら三本と他の七本との間には、一線を画することの出来る大きな開きが、結果として現われている。それはそれとして、右のデータから武者小路本が最福寺に強い親近性を持つことを知り得たのである。

四

百二十五段本、特に古本との関係を追求しているうちに、最福寺本、時頼本、伝肖柏筆本の三本が大きく浮かび上ってきた。次には、古本系統の中に於けるこれら三本の位置を明らかにすることによって、武者小路本の性格をもう少し鮮明にしてゆきたい。

さて、池田博士は古本を四類に区分されたが、この分類と先の武者小路本との一致数とはどのように関連し合うか。左は、根源本の二本も加えてこの興味ある問題を考えたものである。A列の数字が先の武者小路本との一致数。

		A列	B列
○古本第一類			
伝為相筆本……………	3	—	13
伝慈鎮為家兩筆本……………	8		9
伝良経筆本……………	x		(7)
承久本……………	9		10
伝飛鳥井栄雅書入本……………	9		10
最福寺本……………	29		34
○古本第二類			
伝慈鎮筆本……………	3		5
○古本第三類			
伝肖柏筆本……………	18		27
○古本第四類			
時頼本……………	24		x
○根源本第二系統			
宮本氏蔵伝為氏筆本……………	5		10
天理大図書館蔵伝為家筆本……………	6		10

さてA列の数字を見ると、最も数の大きい最福寺本は第一類に属しているが、それに次いで大きい数の伝肖柏筆本、時頼本は、第一類の古本から区別されたものであることに気付く。第一類は、最福寺本を除けば一致数が皆少ない。ここでもし、第一類以外の本であって一致数の少ない伝慈鎮筆本(第二類)を、山田氏の言われるように武田本であるとすると、第一類の最福寺本を除けば、武者小路本に一致する数の多いものは、第三類、第四類として、一般古本から区別された特殊な性格の本だったということになる。そして、このことから逆に、武者小路本と最も一致数の多い最福寺本を、第一類の中では異質のもの、むしろ時頼本や伝肖柏筆本のよう第一類から区別されるべきもの、とするのは暴論であらうか。

最福寺本の特異性を別な角度から確かめてみたい。福井貞助氏著『伊勢物語生成論』には、天福本、武田本のいずれとも異なる時頼本の異文が掲げられている。いまこの異文を先の古本、根源本と比較したらどうなるか。B列の数字がその結果である。このように、時頼本を基準にした場合でも、古本第一類の中にあつては最福寺本のみが特に際立った反応を示すのである。

さて、武者小路本の場合にしろ時頼本の場合にしろ、ともに天福本、武田本と異なる異文によつての比較であつたのだから、A列、B列の数字は、大略定家本からの離反度を示すと見て間違いない。最福寺本、伝肖柏筆本、時頼本、武者小路本は、天福本、武田本の二系統を中心として考えられた定家本とは、他の古本、或いは根源本の二本に比して、遙かに離れたものであつたと解釈できる。或いは、これらを除く他の諸本は、定家本に極めて近い本文を持っていた、と言つてもよいであらう。

次に、片桐氏紹介の「伝兼好筆本」にも触れておこう。片桐氏が古本と判定された新出のこの本は、未だその全貌が世に示されておらず、ここで詳しく検討することは不可能であるが、幸い氏の論文には、定家本と異なる本文について、種々の角度から論及され異文表があるから、それによつて伝兼好筆本の性格を考えてみることにする。

左の表は、伝兼好筆本と、武者小路本を含む古本及び根源本との親疎関係を明示したものである。なお、ここでは先の考察により、最福寺本を除く古本第一類の六本と根源本の二本を一括して扱い、その下に、互いに性格が似通つていた最福寺本、伝肖柏筆本、時頼本、武者小路本をまとめて掲げてみた。伝兼好筆本と上、下欄の諸本の親疎関係はどうか。(左表は60段まで。○印は伝兼筆本と一致するもの)

◇伝兼好筆本の本文◇

段	伝兼好筆本	定家本(武田本)	氏理相為承榮慈最肖時武
1	ことゝや	ことゝもや	○
3	おはしける時	おはしましける時	○
9	かゝるみちには	かゝるみちは	○
9	おほきなる	いとおほきなる	○
12	火をつけむとす	火つけむとす	○
12	ぬす人あり	ぬす人あなり	○
13	おもふには	たのむには	○
13	人のしぬらん	人はしぬらむ	○
14	いはまし	いはましを	○
14	よろこひて	よろこほひて	○
15	いかゝせむ	いかかはせんは	○
19	とよめりければ	とよめりけるは	○
20	なかるへし	なかるらし	○
21	心かろし	心かるし	○
21	人のしらねは	人はしらねは	○
22	といひけれと	とはいひけれと	○
22	ことゝもなむと	ことゝもなと	○
23	まつを	まつに	○
24	哥およみて	うたをなむよみて	○
32	けれとも	けれと	○
37	あひみむ	あひみる	○
40	まことに	しむしちに	○
44	いへとうしむて	いへとうし	○
49	おかしけなるお	おおかしけなりけるを	○
53	物かたりなむ	物かたりけ	○
56	おもひあまりて	思ひおもひあまりて	○
58	あつまりゐて	あつまりきゐて	○

上下○印の密度の差はあまりにも明白で、伝兼好筆本が下欄の最福寺本等のグループに特に親密な関係にあることは、もはや疑いない。そして、これまで追求を続けて来た武者小路本も、この伝兼好筆本に強い親近性を有していたことがわかり、この点でも興味深い結果を提供している。

(又、業平の略歴を巻頭に置くという特異な形式を備えている点でも、武者小路本、伝兼好筆本は共通している。このこともここに付け加えておかなければなるまい。)

この辺で、古本は定家本かという問題について考えておく必要がある。山田氏が古本を根源本第二系統とされたのは、十一箇所の古本系の特徴的本文とされたものが、宮本氏蔵伝為氏筆本や天理図書館蔵伝為家筆本にも通じていたからであ

る。しかし、この十一箇所の本文は、必ずしも古本系全体を覆うものでなく、主に第一類の諸本について言えることであるから、これによって第一類以外の本までも根源本第二系統と見るのは無理なように思われる。

氏とは全く異なる方法で行った私の以上の考察では、最福寺本を除けば、古本第一類の諸本を根源本第二系統とすることは、先の一致数から見ても支障はない。しかしながら、最福寺本、伝肖柏筆本、時頼本などまで同系統とするのは、以上の結果が示すようにやはり困難としなければならぬ。現状では、最福寺本、伝肖柏筆本、時頼本、伝兼好筆本、それに武者小路本などは、なお古本として定家本から切り離して位置づけるのが適当であると信じる。

しかしこの場合でも、古本系を純粹な意味での一系統と看做すことは危険である。依然として古本は、「系統上多少の差異ある雑多の諸本に附与された総括的の名称たる観」を否定出来ないばかりか、そうした傾向をより濃厚にしていくようである。

結語

以上、古本系統について、数量的な考察を加えてみた。通常の系統論は、山田氏が古本系特質本文十一箇所を掲げて分析されたように、同系統の共通本文を指摘してゆくという方法をとるようである。確かにそうしたやり方が本道であると思う。しかしながら、伊勢物語古本系統の研究にそうした方法がどこまで通用するか、その結果がどこまで妥当性を持ち得るかは疑問である(但し山田氏の御考察は、あくまで定家本を志向するもので、この限りではなからう)。古本の本文は、片桐洋一氏も言われたように、さまざまな系統の本文を合わせ持っているところに大きな特色がある。この点、武者小路本も同様であった。

「ある時は大島本系統に、ある時は塗籠本に、ある時は定家本系の天福本のみ、またある時は同じく定家本系の武田本にのみ一致するような特殊な本文」このような本文の系統を文献学的にどう処理するか。私は定家本からの離反という点に注目して、数量的な考察を行ってみた。

定家本はさまざまな系統に分けられると言っても、その間の差違をあまり過大に評価してはなるまい。例えば定家自筆本への還元も可能だとされる天福・武田両本を比べて見ても、両者の差異は決して大きいものでない。定家本は所謂校訂本であって、各系統の差も主として校訂態度の差異として理解するのが順当ではなからうか。そして、数回の校訂に参加した伝本も、かなり似通った性質の本の一群であっ

たと想像される。

古本は、百二十五段本としてこれらの本と多くの共通点を持ちながらも、又差異も少なくなかった。ここでもし、古本の概念を規定するとすれば、百二十五段本で定家の手を経なかった本ということになるが、それならば、定家本を基準にしてそれとどのように異なるか。定家本からの離反距離といったものを中心にして、古本の性格を考えてゆくのも可能ではないか。このようなことを念頭に置いて、武者小路本の本文の性格を追求してみた。(41・1・10)

註(1) 拙稿「伊勢物語成立論序説」(『国語と国文学』昭和39年6月)、「伊勢

物語狩使本形態」(『平安文学研究』第32輯・昭和39年6月)参照。

(2) アラビア数字にて段数を表示した場合は、定家本の相当章段数。

(3) A、B、C等のローマ字は、定家本に無い章段の名称。『伊勢物語に就きての研究』(補遺篇)による。

(4) 拙稿「『昔男』の生と死の間」(『あしかび』第二号、昭和40年11月)

(5) 『伊勢物語に就きての研究』(研究篇)第五節古本参照。

(6) 片桐洋一氏「伊勢物語古註の本文について」(『国語国文』昭和36年10月)。

(7) 山田清市氏「伊勢物語古本は定家本か」(『文学語学』第10号・昭和33年12月)。

(8) 註5に同じ。

(9) 書写年代の明らかなものを列举すると、建仁二年(一一〇二)、承久三年(一一二二)、貞応二年(一一三三)、嘉祿三年(一一二七)、寛喜三年(一一三三)、天福二年(一一三三)。

(10) 註7に同じ。

(11) 片桐洋一氏「伝兼好筆伊勢物語について」(『国語国文』昭和36年9月)及び注6の論文。

(12) 註5に同じ。

(13) B列は初段から125段までの比較。武者小路本の60段までの結果(A列)に比して全般的に数が少ないのは時頼本の性格から来るとともに、武者小路本の場合は抽出異文を、天福本と武田本の主要伝本との比較、としたためであらう。

(14) 十一箇所の本文は次の通り。

(15)

なお、右本文と関係諸本との一致数は、相8、為10、良5、承6、栄8、最7、慈1、肖4、時7、氏10、理11、武(1)。
注5に同じ。

付記 本稿は、平安文学研究会第十一回学会(昭和40年11月13日・於早稲田大学)にて口頭発表したものの一部(武者小路本の本文)の項を、古本系統論としてまとめたものである。

段	古本系諸本
10	むさしのくにいるまのこほり
12	火をつけむとす
23	ひとりゆくらん
24	むかしおとこ女
28	いてていにはいふかひなくてをとこ
41	またさるいやしきわさも
93	おきておもひわひて
94	きりやたちまさるらん
98	おほきおとと
107	うたはえよまさりければ
121	まかりいつるをみて殿上にさふらひけるおりにて